



東京大学教育学部比較教育社会学コースの 「教育社会学調査実習」

——「神奈川県公立中学校の生徒と保護者の生活と意識に関する調査」(2009年度)を例として——

1

本コースにおける「教育社会学調査実習」 の位置づけ

東京大学教育学部比較教育社会学コースでは、その前身である教育社会学コースが1958年に設立されて以来、半世紀以上にわたって「教育社会学調査実習」を学部生の必修授業として開講してきた。周知のとおり、東京大学の学部生は、在学期間4年間のうち前半2年は駒場の教養学部で幅広い教養科目を学び、3年生になってはじめて各学部・学科に所属して専門教育を受ける。この「教育社会学調査実習」は、社会調査に関してほぼ白紙の状態の本コースに進学してくる3年生に、調査の基礎知識の学習、問題関心と仮説の設定、質問紙の作成・配布・回収に関する実務、データセットの完成と分析、分析結果に基づくレポートの執筆と報告書の刊行、シンポジウムにおけるプレゼンテーションという一連のプロセスをしっかりと経験してもらうことを目的としている。サンプルサイズ数千の本格的な調査を例年実施していること、授業時間外にもさまざまな作業を行う必要があること、授業の翌年度の5月末に開催される東京大学五月祭でのシンポジウム開催が授業の締めくくりであるため14カ月間に渡る注力が必要であることなどの理由から、学生にとっては負担の重い授業である。しかし、その負荷の大きさこそが、この授業が本コースの言わば「名物授業」となっている所以である。

本コースの学部学生数は1学年17~18名であり、加えて数名の大学院生も履修する場合が多いため、合わせて約20名の学生が毎年この授業を受講する。授業を担当するスタッフは、年によってやや変動はあるが、本稿で紹介する2009年度を例にとれば、教員2名(教授と特任助教)と、博士課程学生のティーチング・アシスタント(TA)3名という陣容であった。つまり、スタッ

本田 由紀 (東京大学大学院教育学研究科教授)

フ1名あたりが4、5名の受講生を担当するという形で、きめ細かい個別的な指導を行っている。

この授業の長所は、個別性と共同性が適度にミックスされている点にあると考えている。各年の調査対象はあらかじめスタッフ間で相談して設定されているが、その対象にどのような分析を加えるかに関しては、受講生個人が既存研究やフィールドワーク、自分自身の経験やセンスを総合して問題関心と仮説、そしてそれらを検証するための質問項目を作り上げていく。その点では個性が尊重されている。しかし、全員の質問項目を1つの質問紙にまとめあげていく作業や、実査に際しての発送作業や回収された質問紙のコーディング・入力・クリーニング等の過程では、全員でもしくはその都度の班別で、密接な協力が必要とされる。それは受講生間に自然な共同性を育む結果になる。仮説と質問項目を完成させるために毎年夏休みに合宿を行っており、そこでは個々の受講生が懸命に考えるだけでなく、互いに意見やアドバイスをしあって、わいわいところが進む。最終日の夜には花火と酒盛りが恒例となっている。

そうしたすべてが、単に社会調査の方法に留まらない、論理的思考やチームワークなどを含む濃密な学習の場となっている。時には作業の進め方をめぐって受講生間に険悪なムードが生まれたりもするが、それも得難い経験となる。こうした充実した学習の実感が受講生間に共有されているからこそ、この実習は本コースの「名物授業」として誇りと愛着の対象とされてきたのである。

2 授業の流れ

毎年の授業は次のような流れで行われる。まず年度初めの4月から5月初旬までは、特定の社会調査法のテキストを講読することによって、社会調査とは何か、質問紙の作成やサンプリングにお

いて気をつけなければならないことは何かといった、基本的な事柄についての知識を身につける。5月の中旬には、当該年度の調査対象に関する既存の文献や統計などについて、担当する受講生が報告を行う。5月後半には、当該年度の調査対象についてフィールドワークを行う。2009年度の場合は、神奈川県内の公立中学校1校とある市の教育委員会を訪問し、見学や、先生方および指導主事の方々との質疑応答を行った。このようなフィールドワークによって、調査対象の現状や雰囲気、課題について体感し、その後の問題関心や仮説の設定に役立てることが目的である。

5月末には、先述のように東京大学五月祭において1学年上の先輩が前年度の調査結果に関して公開シンポジウムを開催するため、そこに受講生は聴衆として参加し、1年後の自分たちがどこまで成長しているのかを目の当たりにする。このシンポジウムでは、前年度の受講生全員の分析レポートを収録した報告書が聴衆に配布されたうえで、すぐれた分析結果を出した数名が学会発表のような形態で結果を報告し、それに対して外部から招いた研究者や実務家の方から、時に厳しいコメントやアドバイスをいただく。むろん会場の一般聴衆からも忌憚のない質問が寄せられる。すなわち、このシンポジウムは、受講生にとって自分たちがこれまで1年余にわたって取り組んできた成果を広く世に問い、現実世界と応答する経験ができる場なのである。その場を1学年下の受講生はあらかじめ目撃する機会を得ているのであり、それをゴールとしてその後の授業と向き合うことになる。

五月祭の直後に、もう1つ特徴的な機会が設けられている。それは、授業に1学年上の受講生数名を招き、その先輩が書き上げたレポートに対して当該年度の受講生からコメントと質問がなされ、先輩たちは真摯に答えるという機会である。毎年、この回の授業は真剣勝負の様相を呈する。1学年下の後輩からの、数多くの質問の集中砲火に耐えた先輩たちは、授業後にはぐったりとしている。そのお礼に、教員は彼らに豪華めのランチをご馳走するのが慣例となっている。このように、年度間で連鎖状に受講生間の交流と成果の受け継ぎの場が用意されていることが、この実習の「名物授業」としての性格をいっそう強めている。

6月から7月にかけては、班に分かれて各自の問題関心と仮説、質問項目を繰り返し練り、8月

初めの合宿でそれを完成させる。同じ時期にSPSS実習も行われ、データ分析の練習も積んでおく。8月から9月にかけて全員の質問項目を集約し、フェイスシートもつけて調査票を作り上げる。当初の予定より質問数・ページ数が多くなってしまふことが多いので、9月末の、最終稿を仕上げる日には、誰のどの質問を削るかをめぐってぎりぎりの攻防が繰り返される。この日には細かいワーディングやフォントなども含めて全員で綿密に質問紙を校正して完成させるため、翌日の夜明けまでかかることも珍しくない。

出来上がった質問紙はすぐに印刷にまわし、刷り上がってきたものは封入や梱包をして調査対象に発送する。早ければ翌週には回答済みの質問紙が届き始めるので、すぐにナンバリングをしてコーディングの作業に入る。この時期、10月から11月にかけての授業では、大きな机を囲んで延々と全員でのコーディングが続く。コーディングが終了すると、予算に余裕がある年度はデータ入力を業者に発注するが、近年は大学の財政が厳しいため、受講生自らデータを手入力する場合が増えている。年末に入力を終え、年始にクリーニングを行って全質問の単純集計を出す。1月から2月末にかけては、いよいよ完成したデータを使って各自の仮説の検証に入る。班別にスタッフがついて、毎週、前の週からの分析の進展を受講生が報告し、検討しあう。2月末に全体の報告会が開催され、各人の分析レポートを発表する。

翌年度の4月に入ると、五月祭に向けての準備が本格化する。一方では報告書を作成するためにレポートの推敲と校正を進めるとともに、用語説明や既存統計の原稿も新しく作成する。他方では、シンポジウムでの発表者に選ばれた数人が、パワーポイントなどを使って分析結果のプレゼンテーションを作り上げる。何度もリハーサルを繰り返して、立て看板やポスターも用意して、シンポジウムに臨む。シンポジウムが終わった後は、これまでの14カ月間の苦労を振り返って、飲めや歌えやの大団円を迎えるのである。

3

2009年度の神奈川県公立中学校調査データについて

本節では、この「教育社会学調査実習」において2009年度に実施した、神奈川県下の公立中学校に在学する2年生とその保護者に対する調査を

例にとり、データの特性や主な分析結果を紹介することにしたい。

神奈川県を対象地域として選択した理由は、県内に大都市、中都市、都市以外の地域がバランスよく含まれていることと、正直に言えばこの授業の担当教員が県教育委員会に知己を得ていたことによる。なお、2009年時点において、全国の中学生に占める公立中学校在学者は92.5%であるのに対し、神奈川県では87.5%であり、神奈川県では私立在学者比率がやや高いことが公立中学校在学者の特性に影響している可能性がある。また、神奈川県の中学校の1学級当たり平均生徒数は31.8人（全国では29.7人）、教員1人当たり生徒数は16.3人（全国では14.4人）で、いずれも東京都・埼玉県に次いで全国3位となっている。本調査データの分析結果を日本全体に敷衍して考える際には、これらのような神奈川県の中学校の特徴に留意することが必要である。

県内での調査対象の選定に際しては、まず県内を人口分布に即して4つの地域ブロックに区切ったうえで、それぞれの地域ブロックからターゲットとする市を抽出した。それをふまえて県教育委員会に対して各市の教育委員会に調査依頼の連絡をしていただけるようお願いし、了承していただいた9市の教育委員会に、さらに各市内から調査対象校を選定していただいた。結果として、神奈川県内に広く散らばる形で23校の公立中学校が選定された。各中学校の事情により、各校の調査対象生徒数は異なっているが、全体では23校に在学する2,874名の2年生から有効回収が得られた。調査期間は、2009年10月下旬から1月中旬である。調査期間が約3カ月間に及んだ理由は、後述のように保護者用質問紙を直接郵送により回収した中学校があったため、その返送が遅れたケースがあったことによる。

今回の調査では、生徒とその保護者にそれぞれ質問紙に回答していただき、その両者をマッチングして親子ペアデータを作成することが、大きな挑戦であった。マッチングのために、生徒用質問紙と保護者用質問紙の背表紙にあらかじめ同じID番号をナンバリングしておき、その両者をまとめて封筒に入れて中学校の先生方に教室で生徒に配布していただき、生徒にはその場で生徒用質問紙に回答してもらってすぐに回収し、保護者用質問紙は生徒が自宅に持ち帰って保護者に渡して

もらうという方法をとった。なお、数校の中学校では、当時流行していたインフルエンザのため学級閉鎖になったり、2学期制を採用しているためちょうどその間にあたる短い秋休みの間での実施を求められたりしたため、生徒調査も自宅で回答してもらった結果になった。保護者用質問紙の回収方法は、各中学校の希望に即して、学校で回収する方式と、保護者から直接郵送で返送してもらう方式とを併用した。それゆえ、23校の中学校のうち、前者と後者を区別して、後者の中学校については生徒に配布する封筒の中に保護者からの返信用封筒も封入するという作業が必要となった。このように、間に生徒を介していることや、回収方法が2通りになったことなど、複雑な実施の仕方になったため、保護者用質問紙の回収率が危ぶまれたが、蓋を開けてみれば2,409名の保護者から有効回収を得られ、生徒からの有効回収のうち83.2%という高い比率で親子ペアデータを作成することができた。保護者用質問紙の回答者は、91.3%が母親、8.1%が父親、0.6%がその他と、母親による回答が大半であったことから、保護者用質問紙の分析は母親による回答のみを抽出して行っている。サンプリング方法を反映して、得られたデータは神奈川県内の4つの地域ブロック別人口分布とよく対応している。

また本調査では、上記の生徒調査・保護者調査に加え、調査を実施して下さった23校の学校の教員に対して学校の状況や方針をたずねる質問紙調査も実施しており、その回答も適宜分析に使用している。

生徒用質問紙の内容は、中学校での授業や勉強への取り組み方、部活動や委員会などの課外活動への取り組み方、友人関係、学校外での日常生活の過ごし方、小学生の頃の様子、進路や将来への展望、親子関係、自己意識や社会意識などである。保護者用質問紙の内容は、中学校の教育への評価や関わり方、子どもに対する教育方針、子どもとの接し方、保護者自身の自己意識や社会意識などである。今回のように学校経由で調査を実施した場合、家庭の収入や保護者の学歴など、社会階層を把握するための質問項目は、個人情報保護の観点から、学校から拒否される場合が多い。今回かろうじて認められたのは、家庭の所有財（インターネット回線、子ども部屋、プラズマ/液晶テレビなど8項目からの多肢選択）および蔵書数に関す

る質問であった（いずれも生徒用質問紙）。また、学齢期の対象に調査を実施する際には、学業成績が重要な変数となるが、通常は校内やクラス内の成績自己評価を5段階などで問うに留まることが多い。そのことへの対処として今回工夫したのは、英・数・国・社・理の5教科に関して、学習指導要領に即して当該学年で求められる知識や操作を各2項目ずつあげ（たとえば「英語で簡単に自己紹介ができる」「 $x+6=2.5x-7$ という等式から x を求めることができる」など）、その中でできるものを多肢選択でたずねる形の質問を盛り込むことであった。むろん、このような質問で把握できる学業成績はやはり粗いものにすぎないが、「上、中の上……」といった選択肢を提示するような形式と比べると、精度は増していると考えている。分析に際しては、10項目中の「できるもの」の数を、簡易学力スコアとして使用している。

4 主な分析結果

2009年度の受講生がこのデータに対して行った分析結果はすべて、『神奈川県公立中学校の生徒・保護者に関する調査報告書』にまとめられている。加えて、同じデータに対して、授業に関与した東大スタッフ・TAおよびBenesse教育研究開発センターのスタッフが分析を加えた結果を収録した報告書が、同センターのインターネットサイトで公開されている（http://benesse.jp/berd/center/open/report/kanagawa_kouritsu/2010/index.html）。さらに、この年度の授業を教員として担当した筆者が独自に分析を行った結果が、『若者の気分 学校の「空気」』（岩波書店、2011年）として刊行されている。多様で詳細な分析結果はこれらを参照していただきたいが、ここでは興味深い分析結果の例を紹介しておこう。

本データの特長である、親子ペアデータであることを活かした分析例として、上記Benesse報告書に掲載されている武田真梨子の論文「親の期待と子どもの受けとめ方——子どもの将来への意欲と自己否定感に与える影響」があげられる。武田は、保護者用質問紙から把握できる母親の子どもへの期待や接し方が、生徒用質問紙から把握できる中学生の進路意識や自己否定感にどのように影響しているかについて分析を加えている。その結果、(1)母親の地位達成期待が高いほど子どもの

将来志向や進学アスピレーション、親の期待に応えたいという意識は高まるが、自己否定感とは関連がみられない。(2)しかし、子どもが親の期待に応えたいと思っているか否かで統制すると、応えたいと思っていない層では親の期待は子どもの意識に影響を及ぼしていない。(3)子どもが親の期待に応えたいと思う意識は、親が日常的に子どもと一緒に娯楽を楽しんだり、自分の経験を子どもに話したりしている場合に高くなる。これらの分析結果が示唆しているのは、第一に、親が子どもに高い期待をかけるだけで子ども側がそれに従うわけではなく、親の期待に対する子どもの主体的な受けとめ方が重要な媒介要因となっていること、第二に、そうした子どもの受けとめ方は、平日頃からの行動ベースでの親子関係の密度や良好さに規定されているということである。こうした武田の分析に見られるような親子間の影響関係や齟齬の把握は、親子のいずれかのみを実施した調査データでは明らかにすることができない。日本の格差社会化に伴い、家庭のもつ諸資源が子どもに及ぼす影響が強まっていることが指摘されている現在、このデータはその実態を検証するための貴重な素材となる。

5 「教育社会学調査実習」が直面する課題

以上に述べてきたように、本コースの「名物授業」である「教育社会学調査実習」は、密度の濃い授業と良質なデータの収集を通じて、教育と研究の双方にとって高い成果をあげてきた。しかしながら、大学財政の逼迫に伴い、このような充実した授業を今後いつまで継続していけるか、心許無い状況にあることも事実である。指導のうえで重要な役割を担っている助教やTAの雇用、質問紙や報告書の印刷、データの入力などに要する経費の確保に汲々としつつ、毎年綱渡りをするような思いで授業を進めている。単に社会調査リテラシーの育成という面に留まらず、幅広い教育力をもつこの授業を、今後も安定的に実施していきけることを切に願いつつ、可能な限りの方途を探り続けている。



なぜ人は熊野をめざすのか：古道を耕す人，熊野につながる人

——中京大学現代社会学部現代社会学科の社会調査実習の一例——

成 元 哲 (中京大学現代社会学部教授)

中京大学現代社会学部現代社会学科では、3年生を対象としたゼミナールごとに、複数の社会調査実習科目を開講している。野球文化と観客の動向に関する中日ドラゴンズ調査、豊田市足助町の地域再生と街づくりに関する調査、外国人児童の日本語学習サポート団体へのボランティア活動の実践を通じての調査、大学生調査や子どもの貧困と教育費問題の調査など多様なテーマで調査が行われている。その中の1つとして2009年度に実施されたのが熊野古道ボランティアの活動への参与観察と聞き取りを中心とした調査である。ここではその概要を報告する。ゼミの人数は4名で、3年生が中心になって調査の企画から現地調査までを行った。ただ、4年生が1人、08年の現地調査を深めて、卒業論文を執筆するために本調査に参加している。なお、この社会調査実習は、演習(ゼミナール)と連続して開講しているので8単位の科目であり、週2コマ(180分)の授業が通年で行われる。

下記、写真が熊野古道を实际歩いている様子を写している。樹木に囲まれた石畳の熊野古道の観音道は数カ所に何体ものお地藏さんが安置され、



古くから民間信仰が息づいている場所である。

2004年7月7日に熊野古道を含む「紀伊山地の霊場と参詣道」が、世界遺産リストに登録された。熊野古道とは、熊野三山(熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社)に参るための道である。世界遺産はこの「熊野三山」と「吉野・大峯」「高野山」の3つの霊場と、これらを結ぶ「熊野参詣道」「大峯奥駈道」「高野山町石道」からなり、三重県・奈良県・和歌山県に広がっている。09年には世界遺産登録5周年を迎え、様々な記念イベントが催された。

古より伝わる熊野古道の聖地巡礼は、現代においては様変わりし、森や自然に触れ親しむエコツーリズム、健康づくりのためのウォーキングの旅、文化の集積に触れる旅、人とのふれあいの旅など、旅の形は時代と目的に応じて多様化している。このような場所を対象に社会調査実習を行ったきっかけは、2008年度に行った熊野調査を継承しつつ、さらに調査テーマを深化させるためであった。09年度の実習参加者は、08年の調査報告書を読んで、まず多くの人がボランティアとして熊野古道に関わっていることを知った。行政は主に語り部(ボランティアのガイド)養成講座や熊野古道のPR活動を行っている一方、多くのボランティアが古道の整備や語り部の活動をしている。そこで09年度は、この両者はどのような関係にあり、ボランティアの人びとが活動を行うことで何を得ているのかという点に焦点を当てて調査を試みることにした。

今回の調査は予備調査と本調査を合わせて2回、現地調査を行った。その2回の調査でインタビューできたのは、行政では東紀州観光まちづくり公社、三重県立熊野古道センター、紀南ツアーデザインセンターで、ボランティアは「語り部友の会」の関係者である。現地調査の前に事前学習と



下準備が必要である。2008年の調査報告書や他大学の学生が書いた熊野古道に関する調査報告書も参考にした。そのうえで、予備調査として09年10月に熊野に行った。1日目は、東紀州観光まちづくり公社という、熊野のもつ自然などの地域資源を生かしたまちづくりをすすめる行政機関と、古道の整備やツアーのガイドのボランティア活動を行う向井弘晏さんにインタビューした。2日目は、向井さんが主に整備をしている熊野古道の観音道を実際に歩いた。その後、ボランティア活動を行う西一夫さんにもインタビューした。

上の写真は石畳が続き、苔がきれいな観音道で向井さんの話を聞いているシーンである。台風が去った直後に行ったので、道に木々が倒れ、通りにくくなっているところがあった。向井さんに教わりながら、木を切って道の整備を行った。向井さんは大木を切ったり、持ち上げたりする作業を慣れた様子だ。そういう作業の傍ら、私たちの疑問に答えてくださった。

予備調査を終えて3つのことが分かった。第一に、ボランティアの後継者問題が深刻であること。定年を迎えてからボランティア活動を始めの人が多く、時間と金銭の面で制約があって若い人がボランティア活動に参加することが難しいためである。第二に、行政とボランティアは互いに補完しあっていること。インタビューを行う前は、私たちは行政とボランティアの活動は別個になされており、接点は薄いものだと考えていたが、行政が資金を提供し、ボランティアが活動するといった話を聞いて、行政とボランティアの関係は互いに必要不可欠なものであるという印象を受けた。第三に、熊野を支えるボランティアは、見返りを求



めることなく活動しているということ。無償でボランティアを何年も続けていくには、何か特別なものが必要だと考えていた私たちにとって、その回答は意外だった。この回答から、ボランティアを続けるにはその活動から何かを得るといふ仮説を見直す必要に迫られた。

観音道を実際に歩いたときに、向井さんは歩道に落ちている葉っぱを全部とらずに少しだけ残しながら歩いていた。それは、自然に触れ合う機会が少ない都会人のために、「落ち葉を踏みしめる音を楽しんでほしい」という向井さんの思いが詰まったおもてなしであった。

また、現在、熊野では古くから伝わる歴史や文化、豊かな自然を活かした地域づくりとしてのツーリズムが行われている。その代表的なものが、「みえ熊野学」と呼ばれる地元学とエコツーリズムである。地元学は、そこに住んでいる住民自らが地域のことについて調べ、自分たちの地域の魅力に気づき、見つめなおすことによって、その地域の活性化につなげていくというものである。熊野では、この地元学の考え方を取り入れ、みえ熊野学研究会を設立し、熊野の歴史を綴ったものを書籍化する一方、地元で「みえ熊野学巡回講座」を開き、地域の人々に熊野の歴史や文化を知ってもらうという活動を行っている。さらに、県外でも「みえ熊野学フォーラム」というものを開催している。地元学と並ぶもう一つの地域づくりがエコツーリズムである。エコツーリズムは、豊かな自然環境やその地域に根付いた生活文化と地域資源に触れ合い、それを直に体験するという旅の形である。エコツーリズムは、これまで観光資源と見なされてこなかった自然環境に焦点を当て、新



たな価値を見出すことに特徴がある。そのため、エコツーリズムは、観光客が増加するといった地域活性化だけでなく、その地域に住人が自分の地域に対して誇りや自信をもつといった効果をもたらし、近年高齢化や過疎に悩む地域などで注目されている。

予備調査で明らかになったこれらのことから、調査全体のテーマとして「人はなぜ熊野をめざすのか」という問題関心を導き出した。

予備調査の2カ月後、私たちは再び現地調査に行った。世界遺産に登録されたのを記念して建設された三重県立熊野古道センターにおいて、50年以上にわたり熊野古道に関わり、古道の歴史を紐解く作業を続けている浜口禎也さんにお話を伺った。

そして、鈴木兼雄さんの案内で、熊野古道の始神峠（はじかみとうげ）を歩いた。この日は風が強く、道も険しかったので息が上がるほどハードな道のりであったが、始神峠のふもとから見える景色は、その疲れを吹き飛ばすほどの感動があった。「道を守り継ぐことはその地域の責任でもある」と鈴木さんはおっしゃった。

調査の最終日は伊勢市に移動し、伊勢神宮に参拝した。目的は、伊勢神宮にある「おかげ横丁」事務室にて有限会社伊勢福「おかげ横丁」代表取締役の橋川史宏さんにインタビューするためである。橋川さんは、2002年から5年間、紀南振興プロデューサーを務め、04年に熊野の自然や文化を活かした様々なツアーを企画する施設、紀南ツアーデザインセンターを立ち上げた人である。

こういった本調査を終えてからが、まさに調査の本番ともいうべき作業が待ち受けている。

本調査を行った後、インタビュー記録を作るとともに、小山靖憲・笠原正夫編の『街道の日本史 36 南紀と熊野古道』、太宰治の『津軽』、ジョン・アーリの『観光のまなざし』、古川彰・松田素二編の『観光と環境の社会学』など古道の歴史、観光文化、観光社会学に関する文献を講読する作業を行った。また、現地で調査対象者からいただいた資料を整理し、読み込み、これまでの資料や体験をもとに調査報告書『なぜ人は熊野をめざすのか：古道を耕す人、熊野につながる人』（分量は約5万9,000字）を作成した。こうした一連の社会調査実習の流れをスライドとして製作し、大学のオープンキャンパスにて実習参加者が高校生や父母を対象にプレゼンテーションを行っている。自分の知らない世界に触れ、体験し、現地の人たちと交流することで発見することの楽しみ、自分たちがもっていた常識を疑い、その疑問を追及する探究心を養うことが、社会調査の醍醐味であり、これは社会調査でしか味わうことのできないものかも知れないということを社会調査実習の参加者たちが伝えている。

今回の調査を終えて、調査実習に参加した学生と教員にとって最も印象深かったことを2つ、記しておきたい。

第一に、現代の私たちが熊野への旅に求めるものは、熊野という地がもつ自然、歴史、文化の素晴らしさである。調査を通じて訪れてみて、熊野には先人達が祈りを込めて歩いた道、まだ車や鉄道などの交通手段が発達していなかった時代に人々の生活を支えていた道、苔の青さや森の香りなど現代人に癒しを与えてくれる空間としての道など、様々な意味をもっていることがわかった。こうした道が、今を生きる古道ボランティアの手によって新たに発見され維持され続けている。ただ、観光客の年齢層にはばらつきがある。図1は、熊野古道センターからいただいた来館者の資料をもとに、2008年度に古道センターを訪れた人で、古道センターが実施しているアンケートに答えた人数を年代別に表したものである。利用者の年齢が20代未満と50代、60代が多く、20代が非常に少ないことがわかる。さらに多くの客層を引きつけるためには、新たな物語が必要である。

第二に、古道ボランティアが活動を続けていくうえで大変だと感じていることについて聞いたと

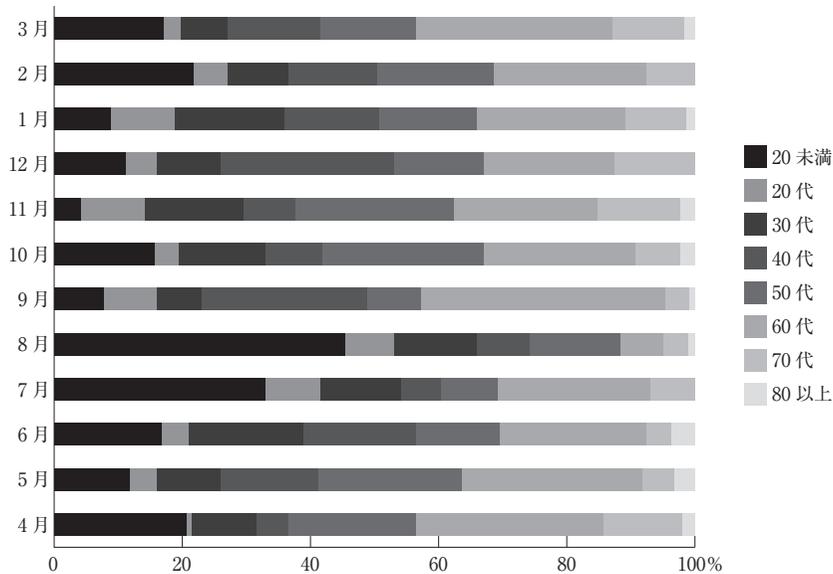


図1 年代別来館者率 (2008年度)

ころ、大変だとは思わないし、辛いこともないという。古道の整備は、ほぼ毎日のように古道を歩かなければならないし、力仕事もたくさんあるから、体力的にも金銭的にも苦労されていることがたくさんあるのではないかと考えていたため、その答えは意外だった。大変だとは思わない理由として、向井さんはボランティア活動をいつやめてもいいという「気楽な気持ち」でやっているということ、行政からやってくれと言われないうこと、さらに、活動に対する報酬をもらっていないことを挙げている。お金をもらっていないからこそ、このような保全活動には限界があるのではないかと考えていた私たちの「常識」が引っ繰り返された思いがした。無償だからこそ続けられる活動というものがあるということを知った。見返りを求めず、活動を続けている向井さんに、私たちはどうしても聞きたいことがあった。それは、活動をやるうえでのやりがいである。それを尋ねると、向井さんは、「やりがいという言葉をもってくとボランティアはできないわなあ」と話した。無償ボランティアを何年も続けていくには、やりがいが必要だと考えていた私たちにとって、その答えはとても意外だった。やりがいのためのボランティアではないのなら、いったい何が向井さんを観音道へと突き動かすのか。その答えは、向井さん

の生き方にあるのだということがインタビューを続けるうちにわかってきた。

若い頃から、向井さんは「根性」「がんばる」「生きがい」などといった言葉を嫌っていた。「きんきらきんの生き方は大嫌い」と語る様子から、言葉の内に秘めた強い意志が感じられた。好きなことを好きなようにやり、これからも自由自在にいるんな人に出会って、一緒に語り合いながら生きていきたい。だから、会社勤めをしていた昔よりも、観音道に関わっている今の方がすごく楽しい、と語っている。活動自体も、自然体でやっているだけで、「これをやらないと」とか「これが俺の生きがいだ」と思ってやっているわけではない。このように決してがんばらず、マイペースで自分のやりたいことをやりたいように続けていくという向井さんの生き方そのものが、熊野古道を支えるボランティアの原動力である。なぜ人は熊野をめざすのか。それは熊野のもつ自然、文化、歴史に触れ、人とのつながりやおもてなしを求めているからである。